日本アルジェリア協会の現状と課題

浦辺彬 *URABE Akira*
日本アルジェリア協会会長／元駐アルジェリア日本国大使

1

日本・アルジェリアの国交樹立五〇周年に際して、記念の出版物が企画されることは大きな喜びであり、また、この拙文によりその出版に寄稿出来ることを大変光栄に存じます。私がアルジェーより帰国し三年ほど経ったころでしょうか、在京アルジェリア大使から日本アルジェリア協会の再建の必要性につきご指摘がありました。私は、アルジェリアにて大使として任務を遂行して以来、同様な再建の必要性を痛感しておりましたので、日本アルジェリア協会を再建するイニチャティブをとることとしました。二〇〇九年三月二七日、六〇名を越える熱心な賛同者や支持者が出席して、日本アルジェリア協会の設立総会が開催されました。約二〇年の空白期間ののち、日本アルジェリア交流の新しいスタートが切られたのであります。

日本アルジェリア協会の歴史は古く、一九六一年、アルジェリアの独立を支援する目的で日本北アフリカ協会が設立されたことまで遡ります。日本は世界の殆どの国と友好関係を維持しておりますので、我が国にはこれらの国との友好関係を促進するための二国間の友好協会が数多く存在しております。しかしながら、私はアルジェリア協会のように、相手の国の独立以前から存在している二国間の友好協会の事例を他に承知しません。この日本北アフリカ協会が日ア両国の友好関係の基礎を築き、一九八一年には日本アルジェリア協会と名称を改めたのであります。ところが、この協会は一九八九年以降アルジェリア情勢の急変により、事実上活動を停止しました。またこの活動停止が長く続いたため、協会の築いた組織や人脈も事実上存在しなくなりました。

約二〇年もの空白期間がありましたが、ようやく新しい協会が設立されたのであります。新しくスタートしたこの協会も、アルジェリアとの友好親善という根本の精神は、昔の協会と同じでありますので、同じ日本アルジェリア協会との名称を付すことにしました。日本とアルジェリアとの交流は一九五〇年代に始まり、一九七〇年代の末頃には三〇〇〇名を越える在留邦人がアルジェリアに居住しておりました。このため、わが国に「アルジェリアの友人」は多いのです。また近年両国間にて様々な分野にて活発な協力関係が進展しておりますので、アルジェリアを訪問

する邦人数は急速に増えております。このためアルジェリアに関心を抱く方の数も拡大しております。設立総会の四年後、日本アルジェリア協会に登録している会員数は一六〇名を越えることとなりました。

日本アルジェリア協会の設立の目的は、歴史、芸術および観光の如く主として両国の共通の関心分野にて両国間での友好親善および協力を促進するための「場」を提供することであります。今後はアルジェリアとの絆を強めたいと思う方、または自分からアルジェリアに関連するテーマにつき「発信」したいと思う方には日本アルジェリア協会の場を活用頂ければ幸いであります。日本アルジェリア協会の典型的な行事は夕刻に開催されるアルジェリアの種々な側面に関する講演会であります。本年実施された講演会では「アルジェリアと明治維新」、「ＦＬＮの武装闘争を先取りする地方青年の運動」、「アシア・ジェバールとアルジェリア仏語文学の系譜」および「クレオパトラの娘と古代アルジェリア」のように、多岐にわたる興味深いテーマが取り上げられました。講演の後には美味しいアルジェリア・ワインのグラスを傾けながらの自由で楽しい話し合いと意見交換の時間が続きます。そこには駐日アルジェリア大使およびそのスタッフも参加します。日本アルジェリア協会は、このような会合に、昔からのアルジェリアの友人のみならず新しい「アルジェリアの友人」が参加されることを大歓迎いたします。

二〇一三年一月、アルジェリア・サハラのイナメーナスにおけるテロリストによる襲撃の最初のニュースが世界中を駆け巡った際、私はオーストラリアに滞在中でした。そこで、悲しい事件の推移をフォローし、二名の日本アルジェリア協会の仲間を含む一〇名の邦人の訃報に接しました。この時私の脳裏に浮かんだのは、ハッシルメル（首都アルジェの五〇〇キロメートル以上南に位置する世界有数のガス田）を初めて訪問した時の光景であります。アルジェリアにおいては独立より日の浅い頃から、多くの邦人の技術者や専門家が主として炭化水素の開発の分野でアルジェリア人と共に働いてきました。彼らの多くは人里を遠く離れ、孤立した場所にて働いておりました。私は二〇〇四年初めてそのコンパウンドと呼ばれる彼らの典型的な居住区のひとつを訪問する機会を得ました。

身の安全のため、皆一緒に、プライバシーの無いセメント造りの高い壁に囲まれた狭い空間に、閉じ込められておりました。コンパウンドの中には質素なテニスコートが二面あり、これが唯一の娯楽施設とのことで、彼らは厳しい生活をおくっておりました。各人、日本に残した家族より、気の遠くなる距離で離れてはおりますが、仕事に対する情熱に燃え、その日焼けした笑顔が印象的でした。また、アルジェリアの国家建設につながるプロジェクト建設に従事することにひたむ

きでありました。

悲劇の発生はこれまで知られることなく去って行った人々に光を照らすことになりました。確かに、アルジェリアは悲しい事件により人々の新たな関心と更なる好奇心を集めることになりました。しかし、多くの日本人にとっては、サハラの自然の美しさやアルジェリアに対する好奇心が関心を集めたのではなく、テロリストの跳梁が、恐怖と怒りにより、関心を集めたのであります。

この両国にとり重要な局面にあって我々は良く考え、アルジェリアが我が国において次には〝良い知らせ〟によって、改めて関心を集めるよう、格段の努力を払う必要があります。この意味で私は日本アルジェリア協会の役割は以前より格段重要になっていると考えます。我々はさらに本腰をいれて協会の活動を続けていくべきでありましょう。

この日本アルジェリア友好五〇周年記念出版の機会に、私は過去にアルジェリアにて汗をながして献身的に働いた邦人技術者達、および事件後も撤退せず働き続けている邦人技術者達に対し敬意を表わしたいと存じます。彼らは今後も任地にとどまり、任務を遂行していくものと確信いたします。日本アルジェリア協会にて我々はイナメーナスの事件を忘れることはないでしょう。しかし我々は悲しみを乗り越え、アルジェリアが我が国において、さらにより良く理解されるよう尽力せねばなりません。

（２０１３年12月、東京にて）